

[道 徳]

異なる意見を尊重する態度を育成する道徳授業の実践

－モラルジレンマ資料を用いての指導計画の工夫－

吉川 俊輔*

1 主題設定の理由

学習指導要領が改定され、平成30年度より小学校では「特別の教科 道徳」が実施されている。これまでの道徳の時間の課題として挙げられていた「登場人物の心情理解のみの指導」、「主題やねらいの設定が不十分な単なる生活経験の話合い」といった指導を克服、改善し、道徳的諸価値について多面的・多角的に学ぶ道徳教育への質的転換が求められている。つまり、「考え議論する道徳」への転換が重要視されているのである。

そのためには、質の高い多様な指導方法の確立が重要であると道徳教育に関わる評価等の在り方に関する専門家会議は述べている。そして、指導方法として「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」、「問題解決的な学習」、「道徳的行為に関する体験的な学習」が例示された。これらの指導方法はそれぞれが独立した「型」として示されたわけではない。読み物教材を活用しつつ問題解決的な学習を取り入れるなど、それぞれの要素を組み合わせた指導を行う等の工夫改良を求めている。

その指導方法の一つとして考えられるのが「モラルジレンマ授業」である。モラルジレンマ資料を用いて、子どもたちを道徳的な不均衡状態、価値葛藤の状態、モラルジレンマの状態に置き、どちらも正しいと認められる道徳的価値を選択していく授業である。安易な妥協案を認めず、示された選択肢の二者択一で解決を求めていく（選択肢は必ずしも二つにこだわらず複数あってもよい）。しかし、「教材に登場する人物は葛藤を抱えているのだから、どちらを選択するとしても満足はできない。」「二つの選択肢を両立させたり、二つの選択肢とは異なる別の選択肢を考え出したりと、ジレンマに陥らない状況を作り出す方法を考えることが道徳教育にとって大切なこと。」というような批判もある。

しかし、モラルジレンマ資料を用い、二つの選択肢を示して授業を展開することで議論が活発になることは多くの先行研究により明らかである。また、自分と異なる考えがあることに気づき、その考えが自分自身で受け入れられるのか検証する機会とすることもできる。それは、道徳的価値を多面的・多角的に学ぶことにつながっていく。教材を吟味し、授業展開を工夫することによって、二つの選択肢のどちらかを選びながらも、他方の選択を尊重し、折り合いをつける態度を育てていくことも可能であると考えられる。

そこで本研究では、モラルジレンマ資料を用いて「動物を飼育する」という行為の道徳的価値を考え、議論する道徳を実践する。その際、モラルジレンマ資料を含む複数の資料を用いて単元を構成する。「動物を飼育する」という行為を様々な視点から見つめ、自分の考えをもって議論に参加できるようにする。そのために、指導計画を弾力的に取り扱い、学習の時期、時数の変更や資料の変更等の工夫を図る。そして、本研究を通して、他方の考えを尊重し、折り合いをつけることで道徳性を養っていくことを目指した実践とする。

2 研究の概要

2017年6月に、長岡市立栖吉小学校の2年生児童23人を対象に行った授業について紹介する。

(1) 主題名

生きものにやさしく D-18自然愛護 A-5 希望と勇気、努力と強い意志

(2) 指導計画

様々な視点から「命の尊さ」、「真理の探究」について考えられるように複数の資料を用いて、単元として学習できるように指導計画を構成した。小学校学習指導要領（平成29年告示）解説編では「3年間指導計画作成上の創意工夫と

*長岡市立栖吉小学校

留意点」の中で「(3) 重点的指導ができるように工夫する」、「(4) 各教科等、体験活動等との関連的指導を工夫する」、「(5) 複数時間の関連を図った指導を取り入れる」、「(7) 計画の弾力的な取り扱いについて配慮する」が示されている。その点に留意して表1の指導計画を作成した。

表1 指導計画

次	時	○ 学習活動	◇ 評価
1	1	○動植物の飼育栽培の経験を振り返る。 ○「虫が大すき」を読む。 ○ファープルの思いを通して動植物とのかかわりについて考える。	◇動植物の命を大切にし、よりよい関わり方について考え、飼育栽培に生かそうとすることができる。
	0.5	○「シロクマ ピース」を読む。 ○生き物との関わりで大切なことについて考える。	◇生物の生態について詳しく学ぼうとする意欲を高めることができる。 ◇様々な考えに触れ、異なる意見を尊重し、自分の考え方に生かすことができる。
2	0.5 1	○「いきものをかおう」を読む。 ○生き物の飼育について議論し、よりよい飼育のあり方を考える。	

(3) 単元構成の意図

① 子どもについて

生活科の学習で小動物の飼育に取り組んだ。事前の意識、実態調査は表2の通りであった。

表2 飼育に対する意識調査

昆虫や小動物が	好き	19人
	苦手	4人
昆虫や小動物を	飼ったことがある	15人
	飼ったことがない	8人
昆虫や小動物をすぐに死なせてしまったことがある。		7人
昆虫や小動物を	飼いたい	17人
	飼いたくない	6人

昆虫や小動物が苦手と思っている子どもがいた。また、昆虫や小動物を飼育し、失敗した経験をもつ子どもがいることも分かった。このような意識や体験から、飼育に対して抵抗を感じている子どもがいることが明らかになった。

昆虫や小動物への興味関心や愛着、飼育に対する思いには個人差があった。愛着や飼育意欲の低い子どもがいる中で飼育の生活科の学習を進めるためには、動植物を愛し、動植物から学ぼうとする気持ちを更に高めていく必要を感じた。

また、飼育に意欲的な子どもにも、死なせてしまった経験に対しての自責の念は深くは感じられず、他の生命を扱っているという意識は十分ではないと考えた。小動物の飼育に取り組む前に、動植物の生命を尊重する気持ちをさらに高めていかなければならない状況であった。

② 生活科との関連性の重視

道徳的価値としての「命の尊さ」「真理の探究」を道徳の時間で学び、それを実生活において判断し、行動していく場として生活科の飼育栽培活動を位置づけた。学んだことを体験する場を設け、道徳的实践力を高められるようにした。

③ 複数の資料を活用しての単元構成

単元を通して、動植物を愛し、優しい心で接するとはどのような行動で表わすことができるのか、複数の資料から考えられるようにした。資料の選択に際しては、動植物の生態について詳しく追究する探究心をもつことも生命尊重につながることに気付けるように配慮した。「動物を飼育する」という行為には「動植物愛護」と「探究」という二つの価値があることに気づき、どちらを選択していくか考えられるようにした。選択していく過程で、動植物に優しい心で接するにも様々な考え方やかかわり方があることを学べるようにし、自分の考えとは異なる立場で動植物に優しく接しようとする方法があることを理解し、それを尊重することで友達の考えに寛容的、許容的な態度を高められるようにした。

(4) 単元のねらい

小さな生き物の飼育について飼う人や生き物の立場になって議論することで、「生命の尊さ」「真理を追究することの大切さ」に気付く。

この資料を読み、Aさんがなぜ困っているのかを確認した。

発問1 Aさんはなぜ困っているのか。

- Aさんは虫を飼いたいけれど、前に虫を飼って、死なせたことがあるから、また同じことが起きないか心配している。
○みんなは飼いたいと言っているけれど、AさんはBさんと友達でBさんの意見も大切にしたいから困っている。

ここまでの学習で0.5時間の授業を終えた。Aさんの葛藤状況を共通理解した上で、自分がAさんだったらどのように答えるかを次時までじつくりと考える時間を確保した。1次で学習した「虫が大すき」、「シロクマ ピース」で養った視点から自分の考えをまとめている子どもの姿も見られた。話し合いを始める前の子どもの考えは表3のとおりである。

表3 話し合い前の子どもの意見（※コールバーグの道徳性の発達と構造参照）

行動	人数	道徳性の発達段階					
		自己欲求希求志向		罰回避と従順志向		個人主義	
飼う	13人	虫が好き、飼ってみたい	2人	みんなが飼いたいと言っているから。虫の命は大切にしなければいけないと勉強したから。	10人	虫を飼うことは虫の命を大切にすることだから。虫を育てると知らないことを勉強できるから。	1人
逃がす	10人		0人	世話を忘れてしまうかもしれないから。	6人	虫の自由を奪うことになるから。	4人

イ 話し合いと飼育意識の確認

話し合いの1時間は①互いの意見の確認。②話し合い。③互いが大切にしていることの確認。④自分のこれからの飼育活動の在り方について考える。という流れで授業を展開した。

発問2 あなたがAさんだったら何と答えるか。

※発言された意見は表3を参照

話し合いは帽子の色で「飼う」「逃がす」のどちらの意見なのか一目で分かるようにしながら進めた。意見が変容したときは帽子の色を変えてかぶり直すことで見取りも容易に行うことができた。以下に示すのは意見変容の要因となった話し合いの一部である。

発問3 違う意見の人に聞いてみたいことはないか。

- C1：飼うことが虫を大切にするといいけれど、飼ってしまったら虫は自由に生きられないから大切にしない。
C2：外で生きていたら他の動物に食べられてしまうかもしれない。飼えば虫を守ることができるから大切にしている。
C3：世話を忘れるかもしれないと言っていたけれど、ピースの飼育員さんみたいに大切に育てようと思えば忘れないと思う。
C4：休んで学校に来られない日みたいに、どうしても世話をできない日がある。その間に死んでしまうかもしれない。育て方もよくわからないからピースの飼育員さんようには育てられない。
C3：休みの日は飼育ケースを持ち帰れば良い。育て方も勉強すればいい。
C5：虫だって家族と一緒に過ごしたいと思う。捕まえて飼ってしまったらもうずっと離れ離れになってしまう。それでもいいのか。
C6：たくさんつかまえて飼えばさみしくなくなる。
C5：たくさん飼えば世話が大変になる。互いに食べ合って死んでしまうかもしれない。
C6：2、3匹ならさみしくないし、世話も大変じゃないと思う。虫の種類を同じにすれば食べ合わないと思う。
C5：本当に食べ合わないのか心配。同じ虫を飼っても、元の家族とは離れ離れになるのは同じ。自分だったら家族と離れるのは絶対に嫌だ。

C 7：飼わなければ虫について詳しくなれない。
 C 8：本や図鑑で調べればいい。
 C 7：本当に飼ってみなければ、本や図鑑に書いていることが本当かどうか調べられない。
 C 8：ファールのような人が書いているのだから、本や図鑑は正しい。
 C 7：ファールは飼ったから調べられた。やっぱり飼ってみないと分からない。
 C 8：でも、ファールは最後に昆虫を逃がしていた。

このような意見交換が行われ、C 1（個人主義）、C 4（罰回避と従順志向）は「逃がす」から「飼う」へ、C 6、（自己欲求希求志向）C 7（個人主義）は「飼う」から「逃がす」へと意見を変容させた。他にも、「飼う」の自己欲求希求志向から「飼う」の罰回避と従順志向への変容、「飼う」の罰回避と従順志向から「飼う」の個人主義への変容が見られた。話し合いを終えた後の子どもの考えは表 4 のとおりである。

表 4 話し合い後の子どもの意見

行動	人数	道徳性の発達段階					
		自己欲求希求志向		罰回避と従順志向		個人主義	
飼う	13人		0人	飼わないと虫の勉強ができないから。虫の命は大切にしなければいけないと勉強したから。	10人	虫を飼うことは虫の命を大切にすることだから。虫を育てると知らないことを勉強できるから。	3人
逃がす	10人		0人	世話を忘れてしまうかもしれないから。虫が死んだら自分の責任になるから。	6人	虫の自由を奪うことになるから。虫の命や家族を大切にしたいから。	4人

自分と異なる意見をもつ子どもと話すことで、道徳性の発達が認められた。また、行動を二者択一で選択するのだが、異なる意見にも価値を認め、自分の選択に迷いが生じている様子も見られた。

話し合いを終え、自分と違う意見をもった人が大切にしていたことが何だったかを教師がまとめた。

「飼う」

○虫のことを詳しく知りたい。

「逃がす」

○虫の生活をこわしたくない。

「飼う」「逃がす」両方の意見とも虫の命を大切にしたい

どちらの意見とも「虫の命を大切にしたい。」という思いにつながることを確認した。その後、今後の飼育活動の在り方について個人で記述した。

発問 4 自分と違う意見の人が大切にしていた思いも考えながらどのように飼育したいか。

※Cの番号は話し合いの番号と同一の子ども

C 4 ぼくは虫が苦手だ。きつとうまく飼えないと思う。でも虫のことを知らないと好きになることもできないし、飼っているうちに好きになれるかもしれないと思った。だから友達と一緒に飼って、お世話のお手伝いをしっかりと、虫のことを知りたいと思う。

C 5 虫のことを考えると飼うのはかわいそう。きっと家族もいると思う。でも飼うときにピースの飼育員さんのようにたくさんかわいがってさみしい思いが少なくなるようにしたい。

C 6 虫が好きで今もカブトムシを育てている。虫を飼うことが虫にとって悪いことだなんて思わなかった。たくさん虫の秘密を調べて最後には逃がしたほうがいいのかと思った。でも逃がしたくない気持ちもまだある。

C 7 虫は最後まで飼うものだと思っていた。ファールのように死なないうちに逃がす方法もあるのだなと思った。でも、途中で捨てるみたいで嫌な気持ちもある。飼いながらどうしたらいいのかよく考えたい。

「飼う」「逃がす」で起こるであろうデメリットを考慮し、次善の策を考えようとしている記述が見られた。安易な妥協ではなく「生命の尊さ」「真理を追究することの大切さ」の両方の価値を認め、自分の生活の中でどちらにより価値を見出し選択するかを考えることができた。

3 成果と課題

(1) 単元の構成について

① 成果

単元を構成し、「生命尊重」「真理の探究」の内容項目について複数の資料を用いて学習した。そのことにより飼育することを多様な視点からとらえられるようになった。「飼育する」「飼育しない」の両方の行為にメリット、デメリットとがあり、一方的にどちらかが正しく、どちらかが間違っているわけではないということを子どもたちは学んだ。その認識をもてたことで、単なる動植物の好き嫌いで飼育をとらえるのではなく、共に地球上に生存している生命として互いに尊重する気持ちが飼育につながっていると気付くことができた。

② 課題

生活科の飼育活動に臨むにあたり、「生命尊重」「真理の探究」の意識を高めたいと願う単元を構成した。しかし、飼育前ということで子どもたちの中で我が事として課題をとらえるのが難しかった。飼育の実体験を通して困った場面に直面した時にそれぞれの資料から心構えを学ぶような構成が必要になってくる。

(2) 異なる意見の尊重について

① 成果

モラルジレンマ資料を用いての話合いを通して、自分と異なる意見にも道徳的価値があることに気付くことができた。対立する考えや行為にも、尊重すべき道徳的価値はある。生きていく上で、二者択一的に自分の行動を選択しなければいけない場面に迫られることもあるであろう。その場合でも、決してもう一方の考えを切り捨てるのではなく、尊重しながら自分の行動に生かしていこうとする気持ちが大切になってくる。そのような態度を「特別の教科 道徳」で学ぶことが重要である。本研究を通して、様々な道徳的価値に折り合いをつけ、異なる考えだからといって排除するのではなく、互いの考えの良さを尊重し、認める態度を養うことができた。

② 課題

折り合いをつけることを前提にして話合いを進めると、安易な折衷案になってしまう恐れもある。それでは異なる考えの立場の人が大切にしている道徳的価値を本当に理解したことにはならない。「折り合いをつけるには妥協すればいい。」という勘違いにつながる恐れもある。そうならないためには、扱う資料が大切になってくる。子どもの発達段階にあった価値葛藤を生み出し、互いの意見を尊重し、認め合えるようなモラルジレンマ資料を開発していくことが重要になる。

4 参考・引用文献

- 荒木紀幸『考える道徳を創る 小学校 新モラルジレンマ教材と授業展開』明治図書出版、2017年
 道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について（報告）、平成28年
 藤川大祐「道徳授業における二値的課題の扱いに関する批判的検討－「考え、議論する道徳」に資する教材開発の構想－」『授業実践開発研究 第10巻』2017年
 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』平成30年